

自然の摂理に沿った意識改革方法論

Methodology of change in awareness in accordance with the law of nature

荻野 徹*、工藤 司**

Toru OGINO and Tsukasa KUDO

Abstract: In this paper we deal with "the consciousness" as a part of the human intelligence. We investigated the cosmic mechanism which will be the source creating the law of nature, and discussed relations with the mechanism and the human consciousness. I tried making a study about an ideal image of the usage of the consciousness. As a result of the study, I created a new methodology of the consciousness reform in order to change the awareness into the smart usage of the consciousness (thinking and judgment) in accordance with the emergent phenomena that is the providence of nature. This methodology clarified a process model for the change in awareness (the consciousness reform), and showed how to take the advantage of achievements of the awareness change into business. Finally I showed that this methodology could play an important role in the spiritual richness and happiness. The new original methodology that we can't find the similar contents in other methods will help solving various problems, and could be also utilized to the education in schools and businesses.

1. はじめに

筆者*が人工知能の研究開発に従事した30年以上前に、人間の知能についても学んだが、未知や疑問が多く能力不足で不完全燃焼のままであった。知能の一環としての「意識」についても、未だ解明されたとは言えず永遠のテーマかも知れない。しかし「意識の使い方」次第で幸・不幸が決まりかねない現実に気付かされ、「自然の摂理に沿った意識の使い方ができれば良いのでは」との思いに至り、自然の摂理と意識の関係について調べ考え始めた。先人の知恵・悟りなども学びながら、失敗を重ねての暗中模索の結果、未だ不完全ながら「意識改革方法論」なるものをまとめた。「自然の摂理に沿った意識の改革」は、筆者自身がまず取り組み実行すべき生涯課題でもある。遅ればせながら、この方法論を自身の心得として取り組み、まずは「己の役割を果たし貢献する」ことに役立てたい。

2. 自然の摂理と楽しい感情

「自然の摂理」とは、一般的な辞書によると「自然界を支配している理法」とある。学問的には、物理学でのニュートンの万有引力の法則などをはじめ、科学・哲学・心理学・文学・社会学・宗教など各分野での偉人・賢人などの自然の摂理について悟られた内容がまとめられ発表されている。このような内容を参考にして、自然の摂理に沿ったあり方（思い方・対応など）を、自分なりに納得して身につけておくことが重要と考える。日常生活をはじめ、人生全体に役立てることができる⁵⁾⁷⁾¹¹⁾。

これらの悟りの難しい内容はさておいて、自分なりに取り組む場合、「自然の摂理に沿ったあり方」になっ

るかどうかは、意識と楽しい感情の関係で判断するのが簡単で良いと考えている。人間の意識には、思い・考え・判断するなどの機能があり、自然の摂理に沿えば、後述するように楽しい感情が生じるようになっているようである。ただし自分だけでなく相手も楽しいことが必要である。

判断基準としては、「お互いに楽しい感情が得られる思い方」を心掛けることから始めると良いであろう。更に楽しい感情は、他から得られる楽しみと自分で創り出す楽しみがあり、後者はいかなる困難な状況下でも可能であり、自分の納得が得られる行動体験を通して会得することが望まれる。

3. 昆虫（ハキリアリ）から学ぶ自然の摂理

前述した「自然の摂理に沿ったあり方」をすると、何か感覚・感情的には良さそうであるが、そもそも「自然の摂理に沿う」とは、いかなることであろうか？

一般的に自然の摂理に沿った進化による生命体は生き延び、逆に自然の摂理に反した生命体は亡びているようである¹⁾⁷⁾。人間も同様であろう。「自然の摂理に沿う」とは、いかなることかを知るためには、生命体の生き様を観察するとヒントが得られる。

一例として、500万匹の大集団で規律正しく集団活動している昆虫「ハキリアリ」の生態から、自然の摂理について学ぶことができる。筆者は「ハキリアリ」のビデオによる集団行動の観察¹⁾⁸⁾から、自然の摂理に沿ったあり方とは、人間に当てはめて表すと下記①・②になると考えている。

① 相手を理解・尊重し、感謝する

② 目の前に創意工夫と全力取り組み

ハキリアリの場合これらのあり方（行動）は、進化の

2017年3月3日受理

* 静岡理工科大学名誉教授

** 総合情報学部 人間情報デザイン学科

途上で遺伝子に書き込まれた、一種の遺伝子プログラムが実行されることにより発生する本能であり、後述する創発現象を伴っている。①・②のような内容が得られたのは、集団行動を何回も観察している内に、このように「感じ取れた」からのように思っている。あえて理屈をつけて説明すると、ハキリアリの場合、目は退化して視覚はほとんどなく、身近な相手を触角と嗅覚により確認して、仲間を識別して認め合い、個々の役割分担を厳守して、協力しながら活動している。このように見える各種行動を整理して、人間に当てはめて表すと①になるとの理屈になる。ただし「感謝する」の項目は、その時には気付かず後から追加したもので、人が協力して活動するためには、相手と自分の存在に「感謝する思い」も必要であろうと考えて追加した。さらに、木の葉を上手に黙々と切り出して巣に運び、葉に菌を植え付けてのキノコ栽培による食料生産などは、まさに理屈抜きで②に相当する。

人間の集団行動でも、自然の摂理に沿ったあり方とは、上記①・②が最低限必要な条件であると考えられる。この場合の「相手」とは、人だけでなく「生物・物・事象」など全てが対象である。①・②に反するような「思い方」をして行動すると、自然の摂理に沿っていないために、個人・家族・団体・社会・国家などは徐々に崩壊するであろうことは、歴史的事実からも容易に想像できる。

このように人間の場合、自然の摂理に沿った「思い方」、即ち「人間の意識のあり方」が重要な役割を演じているらしいことが明らかに見えてきた。そこで以降では、自然の摂理の源である宇宙全体の仕組みと人間の意識の関係について更に検討し、意識のあり方の本来あるべき姿の考察を試みる。

4. 宇宙の仕組みと人間の意識

そもそも「自然の摂理」を生みだしているものは何であり、「人間の意識のあり方」との関係はどのようになっているのであろうか？

いよいよ「自然の摂理」の本質に迫るような問題に踏み込む。上記のような自問に自答するために、科学的観測結果などから推察される宇宙の始まりから終わりまでの仕組みについて仮説を交えてひもとく。そしてこの仕組みの中では一瞬とも言える現在に生きる人間の意識のあり方について考察する。

最新の素粒子物理学での「超弦理論」⁸⁾を参考にした筆者の推察では、138億年前に宇宙母体から出発したエネルギー振動体は、インフレーション・ビッグバンを

経て、自己組織化（結合・融合）とネットワーク化（エネルギー振動共鳴）を繰り返しながら、素粒子、原子、分子などへ組織化されて各種の物質や生命体が形成されてきたと考えている。これらの組織化には、エネルギー振動体の特性である創発現象による「集合調和」（集まり調和すること）が寄与しているであろう。以降単に「調和」と記述した場合も同様に「集合調和」を表している。創発現象は以降で詳しく述べるが、「局所的相互作用により新たな機能（秩序・調和など）が現れるような現象」である¹⁰⁾。

宇宙母体と宇宙空間の関係を表した図1に示すように、真空のエネルギー状態からなる宇宙母体から創出された宇宙空間では、「エネルギー振動体」とその特性（振る舞い）の「創発現象」が全ての源であり、「エネルギー振動体と創発現象こそが自然の摂理を生みだして」宇宙全体

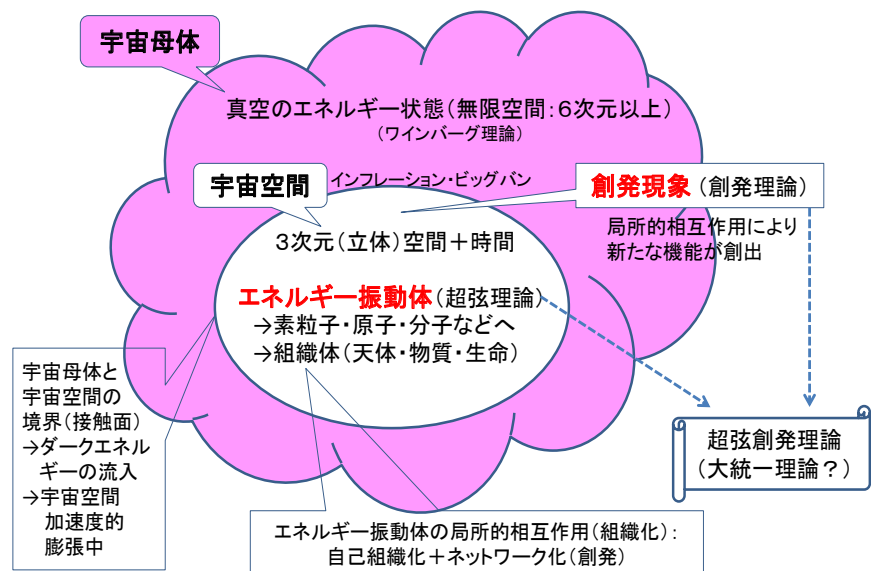


図1 宇宙母体と宇宙空間の構成

の仕組みを形成しているとの考え方（見解）に至った。

このような考え方が上記自問に対して現在たどり着いた前半の自答である（後半の「人間の意識のあり方」は以降に記述）。この自答は仮説に過ぎないが、図1に示すような「エネルギー振動体」と「創発現象」からなる宇宙空間はとてもシンプルに思えて、直感的ではあるが自然の摂理として納得している。しかしこのような直感的な納得ではなく、万人の認める宇宙空間全体を統一的に表す理論式（大統一理論）を求めて、世界中で研究が進んでいる⁸⁾。エネルギー振動体と創発現象の挙動を統合化した理論式を求めようとするアプローチも必要であると考え検討している。いずれにしても人類の英知を結集した万人の認め得る大統一理論の完成が待たれ、いつの日か諸々の仮説の真偽が明らかになるであろう。しかし仮説の真偽解明を待つまでもなく、意識の本来あるべき姿などの考察を続けて、その成果を限られた人生に役立て

役割を果たすことが急務であろう。

宇宙空間の始まりは、佐藤 勝彦の「インフレーション理論」から数学的に説明されている^{1) 2) 13)}。この理論はスティーブン ワインバーグ (米国物理学者) の「真空のエネルギー理論」に基づき、真空のエネルギー状態のゆらぎの中から微細な宇宙空間が現れ、インフレーション (急膨張) によるビッグバンを経て現在に至っている説である。図2に示すように、真空のエネルギー状態 (無限) の宇宙母体から現在の宇宙空間が出現した時を宇宙の始まりと考える。138億年後の現在の宇宙は天体観測結果から、加速度的に膨張中であることが確認されている¹⁵⁾。今後宇宙はどうなるのか? 宇宙の終わりのシナリオとして次の3種類が考えられている⁸⁾。①ビッグクランチ (粉碎)、②ビッグフリーズ (凍結)、③ビッグリップ (破裂)。宇宙母体からのダークエネルギー供給により、宇宙は加速度的に膨張して、③ビッグリップにより、元の真空のエネルギー状態へ戻ると考えている。

ここで物理学的見地から離れて、仏教で有名な般若心経の「色即是空、空即是色」に関して、参考文献1)を参考にすると、「宇宙は空に始まり、色を経て、空に戻る」との解釈もできると考える。この解釈を上記宇宙の始まりと終わりにあてはめると、宇宙の終わりは元の真空のエネルギー状態へと戻るのであろうと推察できる。宇宙に存在する全ての物質・生命体は、全てエネルギー振動体からなり、終わりは元のエネルギー振動体へ戻る仮説から推察すると、宇宙空間全体もこの摂理 (法則) に基づき、元の真空のエネルギー状態 (宇宙母体) へ戻るのであろう。

このような始まりと終わりからなる悠久の時空からなる宇宙の中では、一瞬とも言える現在に生きる (生かされている) 人間の意識のあり方・役割について思いを巡らせてみる。まずはこのような宇宙の仕組みなどを解明する奇跡のような人間の存在と、意識のすばらしさに気付き驚かされる。人工知能では及びもつかない人間の意識は未知の能力を秘めているようで、その使い方次第で幸・不幸が決まりかねず、使い方を上手にすれば良いのではないかとの思いに至る。「意識の上手な使い方」を自分なりに身につける取り組み (意識改革) により、生きがいのある充実した幸福な人生を送ることにつながるのではないであろうか。

5. 自然の摂理に基づく意識改革と欲

前述した意識改革での「意識の上手な使い方」とはどのようなことであろうか。基本的には、「自然の摂理である調和 (集合調和) に沿った思考・判断を心掛けること」であると考えている。図2の中央付近に示す「自然の摂理関連図」ブロックの詳細を表した図3を使い、上記意識改革での「意識の上手な使い方」と「自然の摂理」との関係性を明らかにする。

前述したように、最新の素粒子物理学における超弦理論より推察すると、あらゆる物質の究極の最小単位は、従来言われていた素粒子ではなく、エネルギー振動体であるらしい⁸⁾。エネルギー振動体は、原理的には振動体の共振に基づき調和しながら素粒子、原子などの集合体へ発展するものと考えられ、エネルギー振動体の特性は調和であると考えている。このような調和の特性を備えたエネルギー振動体からなる自然の特性 (摂理) も調和であろう。自然の摂理によって生かされている人間の意識も調和に沿ったあり方 (思考・判断) をするならば、楽しい感情が生まれ幸福な人生になるように遺伝子的につくられていると推察している。

ところが生命維持に不可欠な「欲」機能が、後述するように遺伝子制御から意識制御へ進化したことにより、自由無制限な欲な思いが可能になり、この「欲」が妨げとなり、調和に沿った意識のあり方ができなくなるようである。

人間の意識は自由に思考・判断する能力を備えているために、必ずしも調和に沿ったあり方をしない。むしろ逆の思考・判断をして、楽しい感情の反対の怒り・憎しみなどの感情を起こして、不幸な人生を歩む自由も与えられている。幸・不幸は本人の意識次第とも言えるであろう。自然の摂理である調和に沿ったあり方をするための意識改革 (意識の上手な使い方) を心掛けるならば、幸福な人生へと導かれるのであろう。調和に沿ったあり方とは、図3の下側に示す意識改革ブロック内に二つの代表例を示している。

一例目は前述したハキリアリの創発現象の観察から得た図3に示す①・②である。

二例目は、偉人・聖人の悟りの境地の一例として、般若心経の悟りの境地を説明した参考文献1)より、「あるがままを受け止めて、生かされていることに感謝し、己の役割を果たす」である。

これは上記①+②の内容に相当している。「あるがままを受け止める」ためには、相手を理解・尊重する①が必要であり、「役割を果たす」ためには、創意工夫と全力取組みの②が求められる。どちらの例も自然の摂理から導かれており、表現こそ異なるが同様な内容になるのであろう。このような例を参考に意識改革に取り組み、偉人・聖人の悟りの境地なども学習・修行して、意識の上手な使い方を自分なりに納得して身に付けつつ実行するならば、幸福な人生が期待できる。

進化の途上で遺伝子制御 (本能) から移行して、脳細胞ネットワークによる意識制御能力を唯一獲得した人類は、意識 (思考・判断力) を備えた知的生命体として、約1千億個の脳細胞からなる意識を自由に使うことができる。この意識の使い方次第で、脳細胞同士の創発現象をコントロールでき (意識制御)、他方人類以外の他の生命体には意識機能がないために、遺伝子が自然の摂理 (調

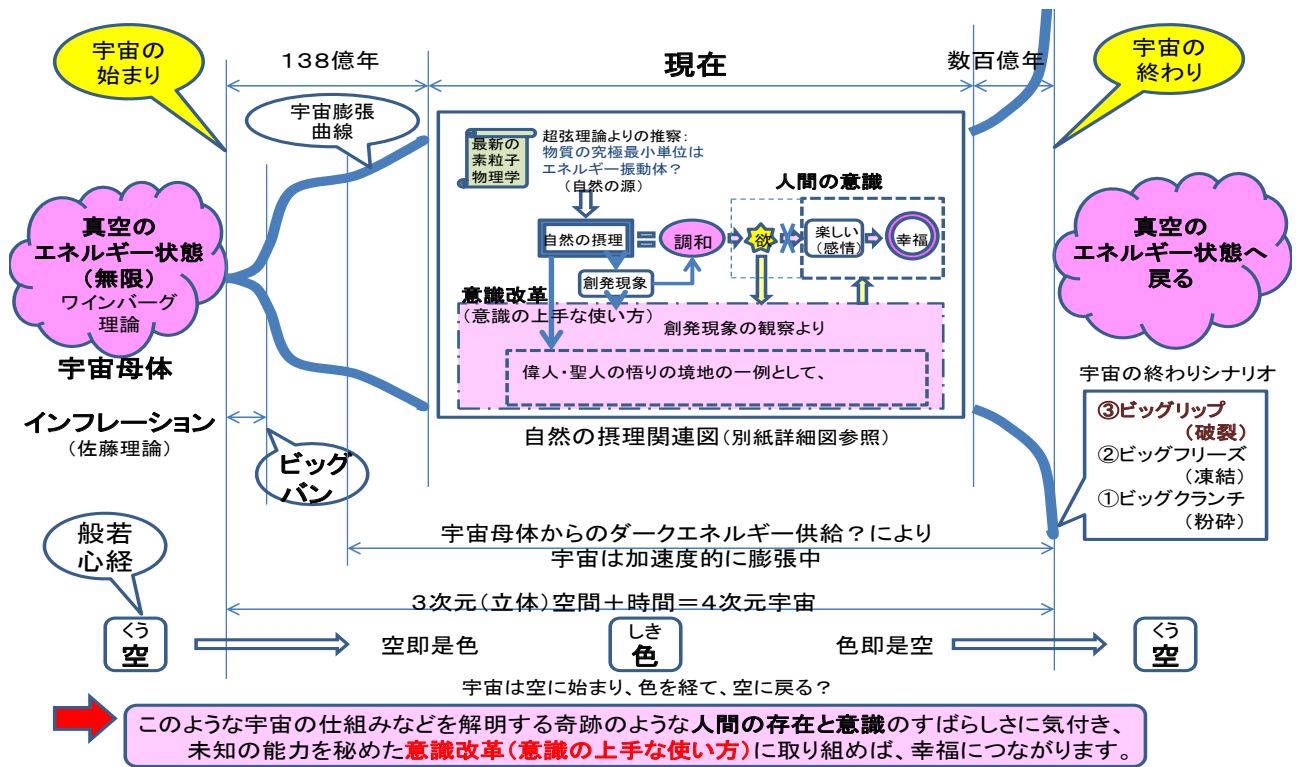


図2 宇宙の仕組みと人間の意識

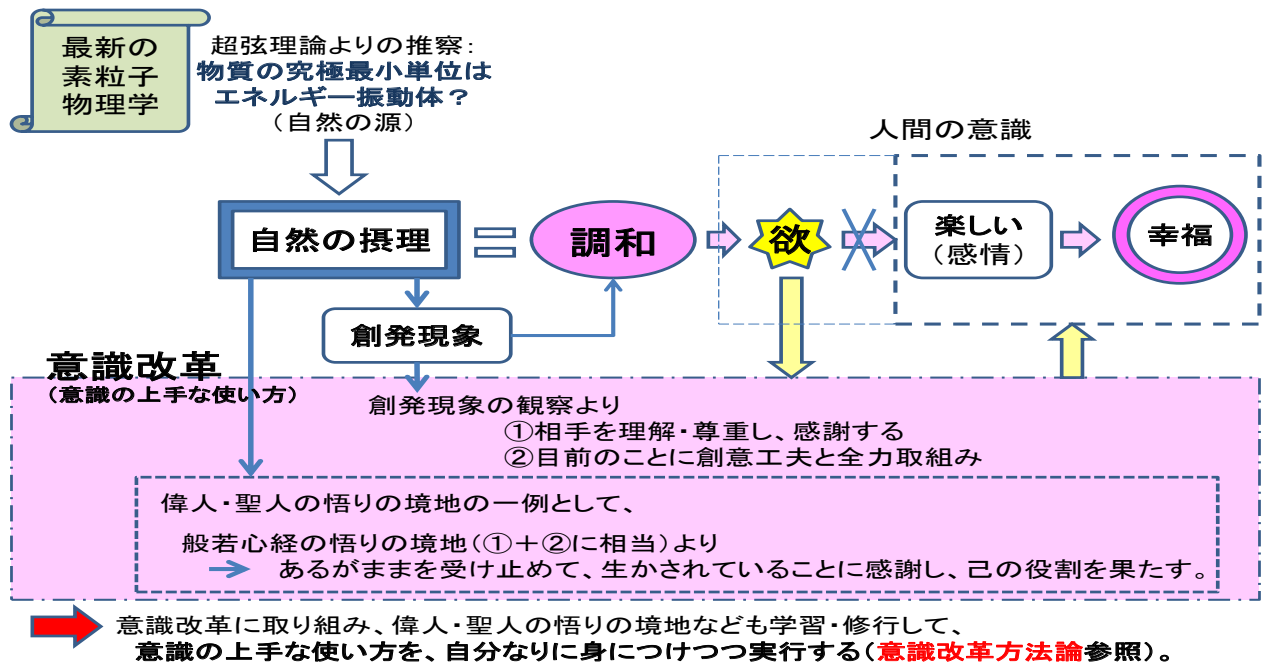


図3 自然の摂理に沿った意識改革関連図

和) に沿うように創発現象をコントロールしている (遺伝子制御・本能)。最小構成要素のエネルギー振動体からなる人類も、その特性である創発現象を発生させると調和になるが、意識の使い方を間違えると創発現象は発生せず、調和 (集合調和) でなく逆の分散破滅に向かうことになる。意識の使い方でも特に「思い方」は、何を思っても本人の自由なので、思い方間違いが創発現象の発生を妨げ、分散破滅に向かう危険性がある。分散破滅では

身体や物事に不具合が発生することから始まり破滅に向かい、集合調和では身体・物事が順調に推移する。

上述した「欲」機能に関しては、人間の意識と創発現象の図4に示すように、欲は生命維持に不可欠で、人は損得判断により欲を育む習性があり、欲が判断を狂わすことになる。そこで意識改革に取り組むことにより、欲を共存共栄の「意欲」に変えて、創発現象を発生させるような上手な意識の使い方をすると、局所部分にあるエネルギー振動体のネットワーク化が起こる (創発)。この

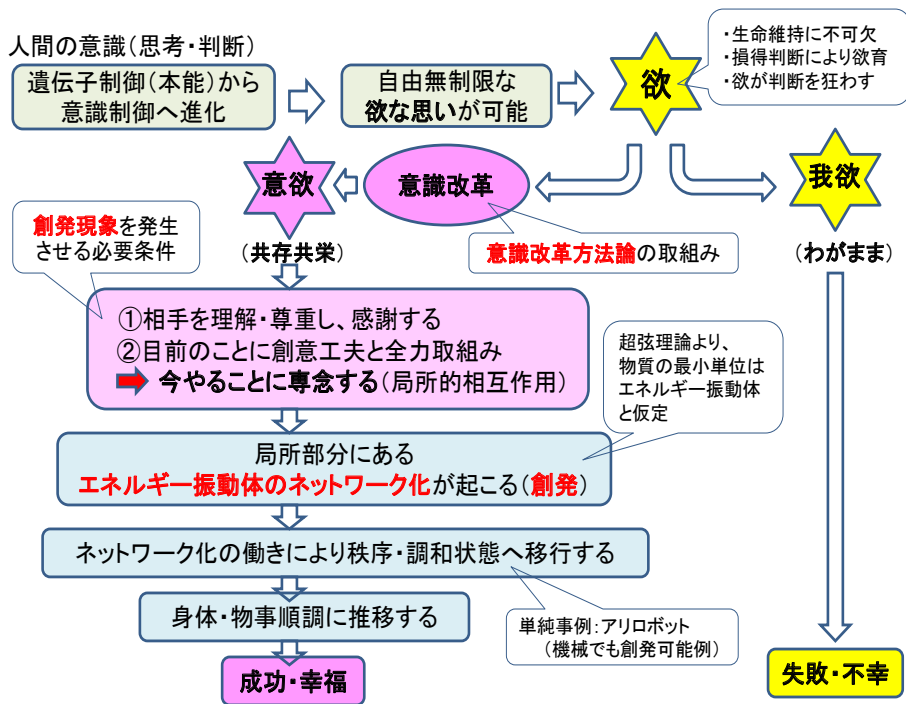


図4 人間の意識と創発現象

ネットワーク化の働きにより、秩序・調和状態へ移行して、身体・物事が順調に推移して、成功・幸福が期待できる。創発の正体は、エネルギー振動体のネットワーク化であろうと考えている。欲を放置すると、わがままな「我欲」に支配される下手な意識の使い方となり、創発現象は起こらず失敗・不幸が待ち構えていると考えている。これらは全て仮説に過ぎないが、素粒子物理学でのエネルギー振動体や創発現象などの解明により、意識との関係が科学的に明らかになれば、人類発展に貢献して意識改革にも役立ち幸福につながるであろう。しかし解明には、将来に至る相当な年月と科学技術などの進歩発展を要する。これらの仮説の真偽の解明を待つまでもなく、一瞬を大切に現在の有意義に生きるために、できるところから意識改革に取り組み、まずは欲を上手にコントロールするなどの対応が求められる。

6. 三大意識（自意識・無意識・宇宙意識）

「意識改革」での「意識」とは何か？についても、ここで明らかにする。「意識」に関する正確な定義は学問分野ごとに異なるが、筆者は下記のような仮説（見解）のもとに考察を進めている。前述した人間の「意識」を機能ブロック図で表すと、図5に示すように「自意識」と「無意識」に大別できると考えている。自意識は思考、判断などを行う脳細胞ネットワークで構成され、大脳皮質の前頭葉部にあり、他の生命体には無い人間特有の機能である。単に「意識」と記述した場合は、狭義には「自意識」を表している。無意識は潜在意識とも呼ばれ、自律神経組織からなる脳細胞ネットワークにより人体の各

臓器を自動（自律）制御しており、大脳辺縁系などにあると考えられる¹⁶⁾。

次に示す内容も同様に医学的な根拠も乏しく、仮説に過ぎないであろうが、考察を進めるために必要な筆者の見解として明らかにする。

自意識での思い・考え・判断などの内容は「感情」経由で無意識へ伝わると考えている。一般に感情は喜・怒・哀・楽・愛・憎の6種類があるとされており、脳の扁桃体が主に感情機能を担っている。脳の視床下部や線条体が担っているとされる「欲」も同様に、自意識での思いによる欲（食欲・性欲・我欲・意欲など）の情報が無意識へ伝わる。

自意識から感情や欲経由で伝わる思いなどの内容により無意識での各臓器の自動制御に重大な影響を受ける。例えば、怒・哀・憎の感情が起こるような思い方を自意識で行うと、ストレスとして無意識に伝わり、無意識の自動制御に悪影響が出て、身体各臓器に不具合が発生すると考えられる。逆に、喜・楽・愛の感情の場合は無意識の制御に良い影響が出て、身体は順調に機能するように進化の過程で遺伝子的につくられていると推察している^{3) 7) 17)}。

無意識はこれらの制御以外に、宇宙意識とコンタクトしながら、詳細を後述する創発現象による秩序・調和への発展にも寄与して、自意識から伝えられる成功イメージの達成のためにも働くと考えている。宇宙意識はコズミックエナジーとも呼ばれており、まさにエネルギー体かもしれない。ダークエネルギーとともに宇宙でその存在が目目され、実在を求めて観測究明中のダークマターではないかとも考えられる。人間の意識は無意識を経由して、これらのエネルギー体とも何らかの交信が可能なのではないかと考えており、未知の能力に興味は尽きない^{6) 7)}。

次に無意識との関係で重要な役割を果たす創発現象について考察し、人間の意識との関係を明らかにして意識改革の重要性に言及する。

7. 創発現象

「エネルギー振動体と創発現象こそが、自然の摂理を生みだし宇宙全体の仕組みを形成して、人間の意識と密接な関係がある」との重要なオリジナル見解（仮説）をここまで明示した。この見解での創発現象についてここでは詳細に触れ、意識改革との関係を考察する。

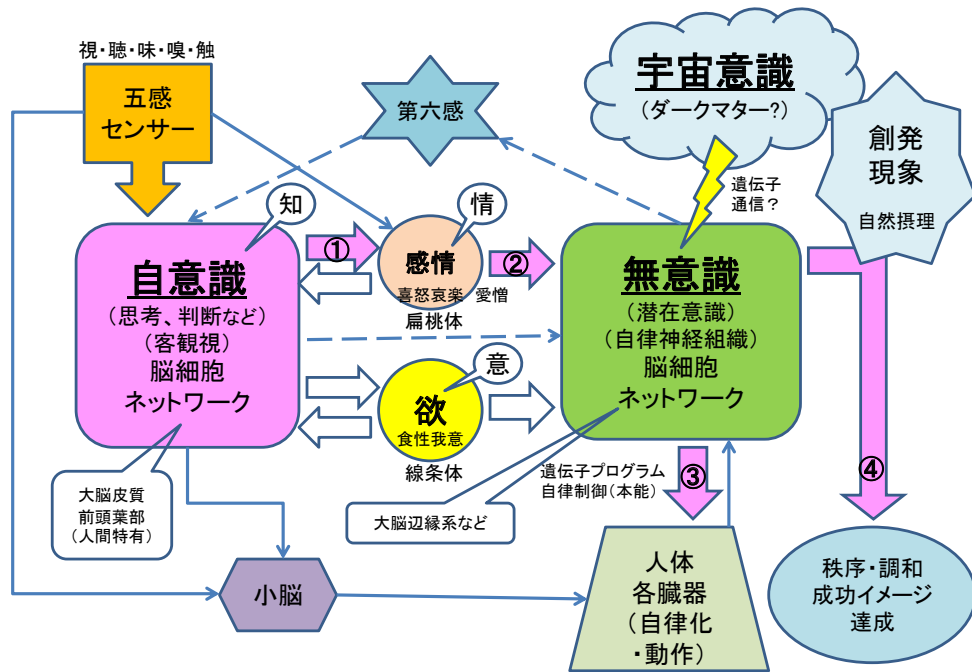


図5 三大意識関連図

創発 (Emergence) とは、人工生命の提唱者クリストファー ラングトン (米国科学者) によると、「部分間の局所的な相互作用の結果、全体が現れ、その全体が部分への環境となり、それによって新たな秩序が形成される現象」である^{2) 10)}。

図6に示すように、下側の楕円で表す局所 (限られた近隣範囲) での相互作用の結果、大局的な秩序が、おのずと現れいずる (発生する)。大局 (全体) に現れた秩序は局所 (部分) に影響を与え、局所で更に創発が起こる。

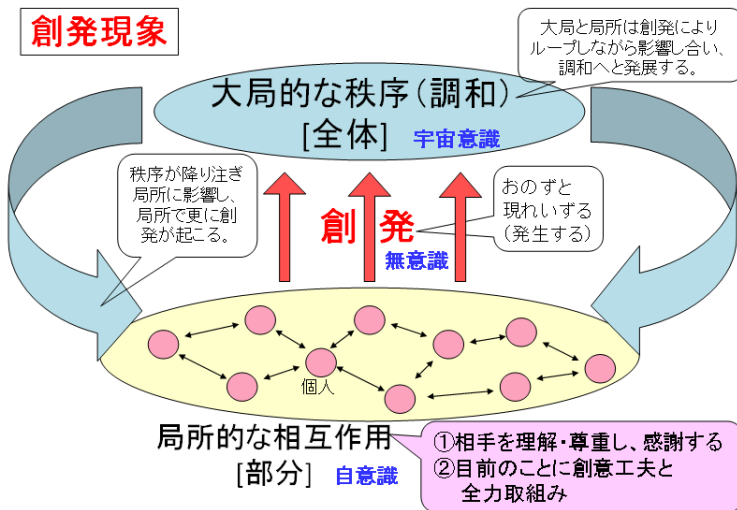


図6 創発現象

大局と局所は創発によりループしながら影響し合い、調和へと発展すると考えている。このような発展は新たな機能の創出でもあり、どのような生命体・物質でもこのような局所的な相互作用の結果、創発現象は発生していると考えられ自然の摂理であろう²⁾。エネルギー振動体

からなる人間は、誰でも創発現象を発生させる意識の使い方さえすれば、集合調和となり共存共栄できるであろう。同様にエネルギー振動体からなる動植物・昆虫類などは、創発現象を発生させる遺伝子の働き (本能) により共存共栄している。人間はこのことから何を学ぶべきであろうか。

創発現象を発生させる役目を遺伝子 (本能) から引き継いだ人間の意識制御方式では、思い方間違いに気付き、意識の上手な使い方を学び修得・

実行して、創発現象を発生させる努力が不可欠である。古今東西の多くの偉人・聖人の悟りなどから学ぶとともに、遺伝子により創発現象を発生させている動植物・昆虫などの集団活動を観察するとよいであろう。前述したように筆者は昆虫 (ハキリアリ) の集団活動などをビデオで観察した結果、創発現象を発生させる条件を人間に当てはめて表すと、図6に示す①・②になると考えている。これら以外の条件も当然考えられるが、これらは創発現象を発生させる最低限必要な条件であろう。ハキリアリの集団活動では、全体の秩序・調和のための特別な

指揮命令系統を担う仕組みや担当アリなどは見当たらない。個々のアリの自律的活動 (局所的な相互作用) から全体の秩序・調和が創り出されると見受けられ、①・②により発生する創発現象の一例であると考えられる。

8. 意識のあり方の本来あるべき姿

ここまでの考察から、万物・事象の「本来あるべき姿」とは「自然の摂理に沿った調和のとれたあり方」であり、人間も「このようなあり方」で思い・発言・行動するのがよいと考えている。言われてみれば当たり前の「このようなあり方」が、人はなぜ自然にできないのであろうか。図7に示すように、欲を育む習性から生じる無制限な「欲な思い」が、気付かないままに「このようなあり方」を阻害している。欲を放置すると、誰でも自然に「このようなあり方」ができなくなるために、「足るを知る」ような上限ありの「意欲」(共存共栄のための欲) に変える「意識改革」の取組みが必要である。このような取組みは、古今東西多くの偉人・聖人により示されており、自分に合った納得いく方法を選んで取組むとよい。どの

ような方法が自分に適しているか見極めのつかない場合は、自然の摂理である「創発現象」をベースにして独自に作成した「意識改革方法論」が参考になるであろう。

以降に示す「意識改革方法論」の手順（プロセス）に従って、上手な「意識のあり方」を修得すると、「本来あるべき姿」となって精神的にも物質的にも豊かになり、成功・幸福が期待できる。図7は意識のあり方の全体像を表して、「成功・失敗の本質」も示している。図7の中で、自分はどこに位置しているか把握することができる。中央の点線で示す横線（0点）より上側に位置しているのが望ましいあり方であるが、誰でも油断すると損得判断の欲により下側に位置しがちである。位置は時と場合により常に変動し、上側に位置すべく努力（意識改革）が必要である。人は意欲と我欲の狭間を揺れ動きながら

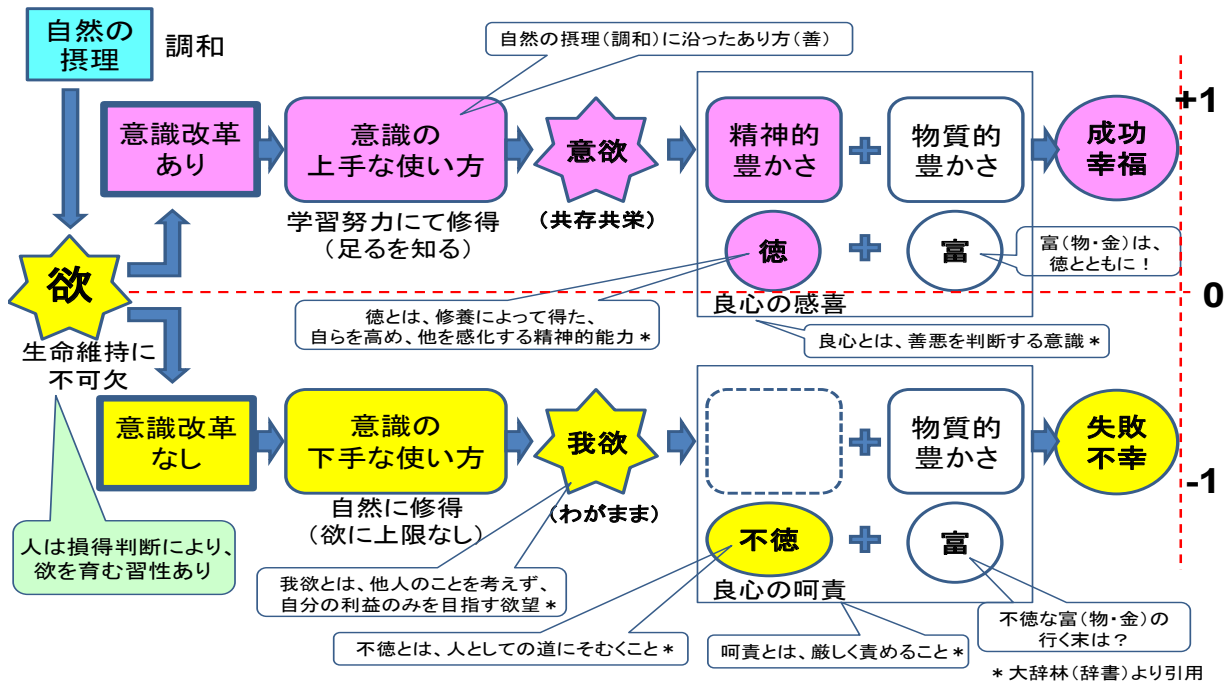


図7 意識のあり方の全体像 (成功・失敗の本質)

成長するのであろう。ここまでの考察で、自然の摂理に沿った人間の意識の本質に触れつつ、感情や欲の機能も含めた検討により本論の核心に迫りつつある。次にこれらの考察の集大成としてまとめた「意識改革方法論」を示す。これは意識改革に取り組む場合の具体的な方法についてプロセスをモデル化したもので、「各自の役割を果たし貢献する」ための手引書の具体例にもなり得る。

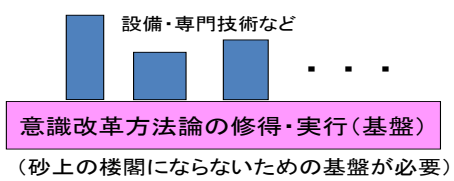
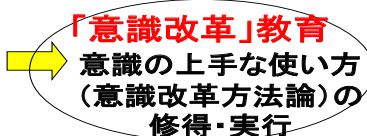
9. 意識改革方法論

前述までの考察を踏まえて、図8に示すように、意識改革についてここではこのように改めて定義する。科学技術の粋を集めた人工知能への期待もさることながら、人工に頼る前に人間の知能の有効活用を図る努力がおろそかになってはいないだろうか。パソコンやスマートフォン、更には専門技術などの修得に比べて、知能の一環としての「人間の意識」を有効活用するために、自分自身の「意識の上手な使い方」の修得に、どれだけの時間・労力を費やしているだろうか。現状では「意識改革」に関して、「意識とは何か」、「自然の摂理と意識の関係は」などを明らかにするような「意識の本質」から取り組んだ意識改革の具体的な方法論についてまとめたものは、あまり見当たらない。

「意識改革」とは

- 英知を結集して役割を果たす方法・心得などを学び、
- 各自の頭に内臓されている「知能コンピュータ」(意識)の上手な使い方を修得・実行することです。

例えば、業績アップなどを図るのであれば、設備や専門技術などに投資するより前に、この「知能コンピュータ」(意識)を上手に使用するための「意識改革」教育に投資すると効果が得られます。



効果

「意識改革」教育の効果は、ビジネスに応用した場合、意識改革による現有人材の有効活用で、やる気を出し創意工夫してグループで問題解決を図り、設備投資や技術導入などを有効に活かしつつ、業績アップに貢献できます。

図8 意識改革

このような疑問や現状に自問自答しながら、未だ確証には至っていないが、意識の機能や感情と欲との関係などを学び推察を続けた。そして意識改革の必要性について、自然の摂理に基づく本質を理解する試みとともに、健康と仕事の両面などで、一石二鳥の効果が得られるような意識改革の取り組み方について、考察を重ねてきた。

このようなアプローチによる考察の集大成としてまとめた「意識改革方法論」を図9に示す。この方法論は具体的には「意識改革からその成果を活かしたビジネス化まで」に必要な8種類のプロセスについて、他では類を見ない独自の内容で、応用トレーニングも含めて修得する方法を明らかにしている。下記に示すように、仮説に基づく単なる空論の展開ではなく、実行体験を重視した方法論である。

図9のプロセス(1)意識改革の「意識」とは何かを知るから、(6)「思い方」の効果を体験して納得しながら理解を深めるまでは、主として個人レベルで意識改革に取り組む場合の方法で、自分の納得が伴う実行体験を繰り返し積みながら修得する。特にプロセス(2)では、参考文献9)14)などの事例(進行がん患者アンケート)により、生死の懸った本気モードでの意識改革の「すごさ」を知る。プロセス(5)と(6)では、参考文献4)の無農薬りんご栽培記録事例から、逆の「思い方」による失敗体験より教訓を得て、信念につなぐ過程を学ぶ。その他のプロセス(1)、(3)、(4)では、ここまでに順に記述してきた自然の摂理、宇宙の仕組み、創発現象などの内容を修得する。次に集団レベルの取り組みのプロセス(7)は、グループで英知を結集させて意識改革を実際に应用するために役立つトレーニングを行う。具体的には「問題解決手法による創意工夫の方法論」によるが、要約すると「本来あるべき姿(理想像)を描きながら実現レベルにまとめ、仮説検証を繰り返して問題解決を図る取り組み」のトレーニングである。プロセス(8)は、意識改革の成果を活かす取り組みを行い、実証実験的アプローチにより各自の役割を果たし貢献するための方法である。

意識改革の成果をビジネスに活かす場合は、新ビジネスモデル構想(コンセプト)作成から、プロトタイプ試作、市場での実証実験などを経て実用化を図る取り組みを行う。プロセス(8)を単独で実施する場合と比べ、プロセス(1)から(7)までの意識改革成果を活かした(8)の取り組みの場合は、集団の英知の結集が創発現象を伴い、まさに奇跡を生むがごとく成果も期待できる。例えば知恵を出し合って新商品開発を行う場合などで、思いがけない画期的な成果につながることも夢ではないであろう。

「意識」に限らず、何事もその上手な使い方を身に付けるためには、「上手な使い方」を学びながら実行して経験を積む努力が必要である。学習・努力なしに自然と身

に付くのは、残念ながら「下手な使い方」である。人は常にしている損得判断により欲を育む習性があり、欲の中でも特に我欲(わがまま)のために下手な使い方が自然に身に付くことになる。学習努力なしで良かれと思う「思い込み」による我流では、我欲が出て下手な使い方となる。意識の上手な使い方は、学習努力によりはじめて修得できる。学習努力による修得方法をプロセスモデルとしてまとめたのが「意識改革方法論」でもあり、下記のような他にはない特長がある。

プロセス(1)で「人は何のために生きているのか?」を自分自身に問いただすことから始まり、その答えを求めてここまで記述したような意識・感情・欲などの仕組みを学ぶ。更に宇宙全体の仕組みと人間の意識との関係から、奇跡のような存在の自分と意識のすばらしさに気付き、求める答えの糸口を自分でつかめるような工夫が随所に散りばめてある。例えばプロセス(5)と(6)では、上述したように逆の思い方による失敗事例から学ぶとともに、あえて自分で逆の思い方をやってみる逆説的手法も取り入れて、思い方の効果を自分で実感できるように工夫している。特に欲との対応では、我欲を共存共栄の意欲に変えて、自然の摂理に沿った調和のとれたあり方(思い方)を修得する方法が、プロセス(4)～(6)で繰り返し試行して学習できるようになっている。プロセス(7)と(8)では、ここまで修得した意識改革の成果を活かして、「自分の役割を果たし貢献するためのトレーニングと、市場・現場で実証・体験する具体的な方法」が示してある。

現状ではこのような方法と特長を備えた意識の上手な使い方を修得・実行するための一貫した手引書的なものが見当たらない。現行の学校教育や社会教育などでもこのような意識改革教育が不足しており、役立つと思われる。このように自然の摂理に沿った意識改革方法論は、人生の様々な問題解決に役立つとともに、例えば起業家育成教育や社内教育などにも取り入れられると、更なる貢献ができ成果が期待できる。

ここまで述べたように、各種疑問とそれらの考察に必要な仮説をスタートにして、様々な考察を重ねた結果、このような方法論にまとめられた。各仮説の真偽解明は今後の科学技術などの発展に委ねられ、相当な年月を要するであろうが、解明を待つまでもなく対応・対処が必要である。したがって方法論の各プロセスでは、仮説による単なる空論ではなく、仮説検証や実証実験的取り組みでの実行体験を通して、自分なりに納得しながら対応・対処できて問題解決に役立つ方法が示されている。

なお、この方法論に基づく具体的な教育カリキュラム・内容などは、図9に示す各プロセスの実行スケジュール(ステップ1・2・3)の順に、実施済みも含めて別論文で明らかにする予定である。

意識改革方法論:意識改革からビジネス化までのプロセス(1)~(8)

- (1)意識改革の「意識」とは何かを知る。
 ↓ 何のために生きているのか?「生きがい」とは?
 →自然の摂理→宇宙の仕組みと意識→感情と欲
- (2)意識改革の「すごさ」を知る。
 ↓ 「進行がんから生還するには」の患者アンケート結果
- (3)意識改革の実行キッカケを作る。
 ↓ まず第一歩は、創発現象に沿った思考法から入る。
 →自然の摂理に基づく創発現象とは?
- (4)創発現象に影響する下記のような「思い方」を試行してみる。
 ↓ ①相手を理解・尊重し、感謝する。
 ②目前のことに創意工夫と全力取り組み。
- (5)このような試行に懐疑的な場合は、逆の「思い方」をやってみる。
 ↓ 事例:「奇跡のりんご」の教訓 →我欲から共存共栄の意欲へ
- (6)「思い方」の効果を体験して納得しながら理解を深める。
 ↓ →意識改革は、自分の納得が伴う実行体験を通してのみ修得でき、
 成功・失敗経験を通して見えてくるものがあり信念となる。更なる向上を目指す。
 →自然の摂理に沿った調和のとれたあり方(思い方) →欲との対応
- (7)意識改革の応用トレーニングを行う。
 ↓ 「問題解決手法による創意工夫の方法論」の修得と演習
 別途下記のようなトレーニング講座で実施する。
 問題/課題の選定、現状分析、改善案、理想像描写、トレードオフ、
 実現レベルコンセプト(仮説)、実行・検証、企画書作成、プレゼン等
- (8)意識改革の成果を活かす取り組みを行い各自の役割を果たし貢献する。
 ↓ 事例:上記「方法論」を駆使することにより、問題/課題解決の一環として、
 ビジネスイノベーション(新事業創出など)が期待される場合は:
 新ビジネスモデル構想(コンセプト)作成→プロトタイプ試作
 →実証実験→試行錯誤→評価などを経てビジネス化・実用化を図る。

各プロセスの実行スケジュール

ステップ1

プロセス(1)~(8)の全体内容把握と取り組みのための講演(2時間)聴講・Q&A

ステップ2

プロセス(7)の応用トレーニング講座受講:
 全12回シリーズ、毎週1回(2時間)、3か月連続

ステップ3

プロセス(8)の実施: プロトタイプ試作、市場での実証実験など、約半年~1年

図9 意識改革方法論

10. 豊かさと幸福（まとめ）

前述した意識改革方法論が、人生の豊かさと幸福にどのように影響を与え、そして重要な取り組みであるかを最後に示して本論全体のまとめとする。

豊かになれば幸福になれると信じて、豊かさを求めて勉強や仕事に励んでいる場合、その豊かさとは、物・金が豊富な「物質的豊かさ」をさすことが多い。図10に示すように、幸福は物質的豊かさとともに「精神的豊かさ」を伴う必要があると考えており、これは下記理由から筆者持論の幸福論でもある。精神的豊かさとは、ここでは「意識の上手な使い方ができる状態」と定義しており、このような意識の使い方ができると、前述したように我欲を意欲に変えるときともに、楽しい感情が生まれ幸せを感じる。楽しい感情は物質的にも豊かな状態を必要

「豊かさ」とは

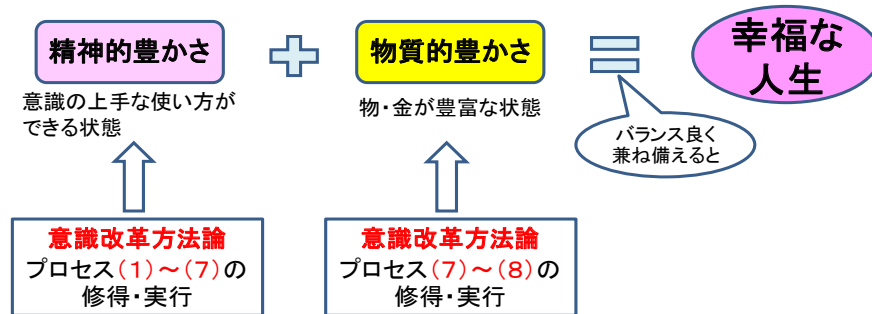


図10 豊かさと意識改革方法論

とするが、十分条件としては精神的豊かさが不可欠である。必要十分な両方の豊かさをバランスよく兼ね備えることが幸福へ導かれる秘訣であろう。バランス良く兼ね備える配慮は、精神的豊かさでの意識の上手な使い方の修得により身につけ実行できる。

前述した意識改革からビジネス化までのプロセスをまとめた意識改革方法論は、プロセス(1)～(7)が精神的豊かさを育み、(7)・(8)が物質的豊かさを育て、両方の豊かさをバランスよく兼ね備えて幸福な人生を築く手引書のモデル例としても役立つであろう。プロセス(7)意識改革の応用トレーニングは、両方の豊かさをつなぎ一体化させる役目がある。従来(現状)は物質的豊かさを求めることに傾注し、精神的豊かさが軽視されている。更にその豊かさの求め方が、このようなプロセスで具体的に明示されていないために修得も困難であり、各種問題発生要因にもなっている。意識改革方法論の修得・実行により、両豊かさが得られて各種問題解決にも寄与して、幸福な人生が期待できると考えている。

11. おわりに

自然の摂理に沿った意識改革を行うために必要と考える「意識改革方法論」について、考察とともに具体的な

方法(プロセス)を明らかにした。未だ不完全な方法論ではあるが、意識改革に取り組みきっかけになり、様々な問題解決や教育にお役に立てればと更なる検討を重ねる。筆者自身の意識改革にも終生取り組み、「己の役割を果たしながら貢献」できればと願っている。将来的には、人工知能ロボットなどが人間に取って代わるのではないかと危惧も聞かれる。しかし未知の能力を秘めた人間の意識の有効活用を図る意識改革に取り組み、各自の役割を果たし貢献できて、人工知能や他の生物も含めて共存共栄できるであろう。

参考文献

- 1) 新井 満 「子どもにおくる般若心経」 朝日新聞出版(2008年)
- 2) 有田 隆也 「人工生命」 医学出版(2002年)
- 3) フランシス・S. コリンズ、矢野 真千子(訳)「遺伝子医療革命」NHK出版(2011年)
- 4) 石川 拓治「奇跡のリンゴ」幻冬舎(2011年)
- 5) 川喜田 二郎「創造と伝統」祥伝社(1993年)
- 6) 村上和雄「生命の暗号」サンマーク出版(1997年)
- 7) 村上和雄「生命の暗号2」サンマーク出版(2001年)
- 8) 村山 斉「宇宙は何でできているのか：素粒子物理学で解く宇宙の誕生」幻冬舎(2010年)
- 9) 岡本裕「9割の病気は自分で治せる」中経出版(2012年)
- 10) 佐倉 統、北野 宏明「人工生命というシステム」ジャストシステム(1995年)
- 11) 佐々木 閑「科学するブッダ」角川(2013年)
- 12) 佐藤 勝彦「宇宙論入門-誕生から未来へ」岩波書店(2008年)
- 13) 佐藤 勝彦「インフレーション宇宙論」講談社(2010年)
- 14) 土橋 重隆「50歳を超えてもガンにならない生き方」講談社(2012年)
- 15) 科学雑誌 Newton「ダークエネルギー(2012.10)」ニュートンプレス(2012年)
- 16) 科学雑誌 Newton 別冊「脳と心」ニュートンプレス(2012年)
- 17) 科学雑誌 Newton 別冊「DNA 生命を支配する分子」ニュートンプレス(2008年)
- 18) NHKTVスペシャル「生命40億年はるかな旅 第7集：昆虫たちの情報戦略」NHK(1994年)